こがくらだより

第41号

令和６年　３月　６日
長崎市立小ヶ倉小学校
校　長　　桐山　充晴

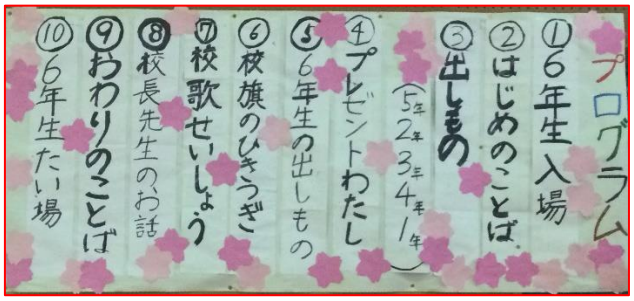
【学校教育目標】「学ぼう 鍛おう 希望を語ろう」～心動かす～

６年生を送る会

昨日「6年生を送る会」が実施されました。在校生が卒業式に参列しないこととし、「6年生を送る会」は卒業式に匹敵する、学びの多い大切な全校行事です。

私たちの学校生活は児童と教職員、児童同士の選択できない出会いから始まっています。私たちの出会いは偶然です。偶然の出会いからスタートして、それぞれの学年がそれぞれの努力とつながりで絆を築いてきました。それぞれの学年がここまで成長してきました。コロナ禍の制限は受けたものの、それぞれの学年は６年生と大いに関わってきました。６年生との関わり合いの中で６年生から多くを学び、いろいろな場面で支えてもらったことでしょう。別れるそのとき、在校生は６年生へ何を伝えることができるのか、６年生は在校生に何を残せるのか。お互いに立派に成長した姿と今の思いと気持ちを全力で伝え合った会となりました。

この「～を送る」というのは、「送り出す」という意味で、簡単に言うと「お別れ会」です。しかし、実はもう1つの意味として「6年生に〇〇を贈る会」ともいえるのです。それは、「感謝」「ありがとうの気持ち」「応援する気持ち」などです。そんなこの会は、たくさんの「ありがとう」や「がんばって」が詰まっていました。６年生を慕う下級生と今までリーダーとして引っ張ってきた６年生が１つになって小ヶ倉小学校のよさを表現しあいました。「子供たちの心の成長、そして、多くのありがとうの気持ち」に包まれました。



御多用中にもかかわらず、御参観いただいた保護者の皆様、ありがとうございました。

素敵な子供たちが作り出す心温まる時間を共有できたことに感謝いたします。

卒業式練習

先月の２６日からスターした「卒業式練習」ですが、６年生はまさに３月１８日の本番に向けて「有終の美」を飾ろうと全力で練習に励んでいます。

「有終の美」
物事を最後までやり通し、最後を立派に仕上げること。

「最後を立派に仕上げる」という意味で使われることが多いと思いますが、私は「物事を最後までやり通し」という部分がこの言葉の大切な意味ではないかと思っています。「毎日一つ一つ積み重ねることを一生懸命にやってきたからこそ、最後を立派に仕上げる力を身につけることができる」のではないでしょうか。そういう意味では、むしろ１年生から５年生にも当てはまる言葉ということになります。今年の６年生は、途中、コロナウイルスの影響に悩まされ、多くの制限の中での学校生活となってしまったのでしょうが、間違いなく、６年間毎日、一つ一つ大切なことを積み重ねてきたはずです。

「一つ一つ積み重ねる」と言えば、次の言葉が思い出されます。

「たゆまざる 歩みおそろし かたつむり」
（彫刻家 北村西望）

彫刻家・北村西望氏が長崎の平和祈念像を制作しているときに起こったことです。前の日の夜、足元にいたかたつむりが次の日の朝には高さ１０ｍ程の祈念像の頭のてっぺんまで登っていたのを見て、びっくりされたということです。あんなゆっくりしか進めないかたつむりなのに、一晩であんな高いところまで登ったのかとびっくりされたのです。この詩はその時に詠まれた詩です。「歩みは遅くとも、あきらめず歩みを止めなければ、いつかは高い目標に到達できる」・・・すばらしいことです。うまくいくこともあれば、当然うまくいかないこともあるでしょう。しかし、歩みを止めなければ、いつかはゴールにたどり着くことができるのです。誰もが目標を掲げ、ゴールを目指します。「有終の美」を飾るために、「たゆまざる 歩みおそろし かたつむり」でありたいという思いが、６年生の姿に重なりました。そう思わせてくれた６年生なら絶対に「有終の美」を飾れます。

裏面あり

ホームページには、この面は個人の特定ができないよう加工して掲載します。

6年生に贈る会